

和歌山県立紀伊風土記の丘

黒潮の海に糧をもとめて—古墳時代の海の民とその社会—

開催期間：平成30年9月29日（土）～平成30年12月2日（日）



【企画展の内容・目的】

- 海浜を生活の場とした、古墳時代の海の民の活動を出土遺物から紹介することで、海に興味・関心を持ち、より身近に感じ、海を守ることの大切さに気付く機会とした。
- 古墳時代の海の民や、その生業について深く学ぶ記念講演会・講座だけでなく、ワークショップを実施し、製塩土器づくりや古代の塩づくりを体験することで、製塩土器を用いた土器製塩の大変さや工夫を体感する。
- 古墳時代の人々が海を利用した幅広い交流や生業から海の恵みを得ていたことを理解し、和歌山の海の民の活躍について知る機会とした。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成30年9月29日（土）～平成30年12月2日（日）
- 開催場所：和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 常設展示室
- 入場者数：4,161人



和歌山県立紀伊風土記の丘資料館



特別展会場 入口



准構造船 船材



准構造船 模型

第1章では、海で活動する上で欠かすことのできない船について、准構造船の船材や准構造船の模型・船の道具から、船の形状や構造、動かすために用いた道具について理解を深め、海で生活する必需品である船について知ることを目的とした。

准構造船の船材は露出で展示し、船の大きさや質感を体感し、加工の痕跡から造船技術について理解を深め、船について考えるきっかけとし、海への興味とイメージを高めていただけたと考える。



地ノ島遺跡出土人骨



西庄遺跡出土漁撈具

第2章では、和歌山県内と和歌山に隣接する淡路島や大阪府南部の遺跡を紹介した。特に、西日本最大級の漁撈集落である西庄遺跡を中心に展示し、地域ごとの特徴と地域間の関係性について紹介した。また、西庄遺跡の生業の道具について紹介するとともに、古墳時代の海の民が食べた魚や貝から、豊かな海産資源の恩恵を受けていたことを知り、豊かで美しい海を守り伝えていくことの大切さを学んでいただいた。

県内に多くの海浜集落があることを知っていただくとともに、それぞれの地域で特徴があることを知っていただいた。地ノ島遺跡出土人骨は、背丈や病気の痕跡など、当時の人々をイメージしてもらえたと考えられる。また、西庄遺跡出土の貝殻や魚骨からは、当時の海の民の食生活のイメージを高めていただけたと考える。



おじょか古墳出土埴製枕



三浦半島・房総半島の出土遺物

第3章では、志摩半島、三浦半島、房総半島の古墳や洞穴遺跡を中心に紹介した。三浦半島で出土した鹿角製複合釣針は、和歌山県で出土したものに類似しており、紀伊半島西部で開発され黒潮の流れに沿うように東へと伝わったと考えられている。また、黒潮を介した海の民の交流は物質だけでなく、精神面にまで及ぶほど深いものであったことを紹介した。

物や技術の伝播に黒潮が大きな役割を担っていたことを知ることで、海の道の重要性を認識していただけたこと、黒潮の果たした役割の大きさを、イメージしていただけたと考える。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



松崎遺跡出土知多式製塩土器



西庄古墳群副葬品

第4章では、王権や在地首長の関与が考えられる海浜集落について紹介した。西庄遺跡や松崎遺跡を紹介することで、集落規模が急拡大し、集落構造が整理されるなど、外部からの圧力により海浜集落の様相が様変わりしていくことを学んでいただいた。

このような海浜集落の変化は、王権が海の民を取り込み、黒潮を利用した物流ルートを掌握したことを示すと考えられており、海の民を取り込むことが、政治上非常に重要であったことを認識していただいた。海の民が果たした役割の大きさを、イメージしていただけたと考える。

【来館者の声】

- 黒潮をつうじた古代の交流について知ることができた。
- 本物と復元しているものが展示されており、臨場感があってよかった。
- 多くの釣針を見ることができ、大きさや形が比較できる展示でよかった。
- 魚の絵を海に見立ててガラスに貼っており、イメージがわいてよかった。
- 海について知ることができ、自分たちに何ができるか考えることができた。

2. 関連事業の内容

■特別展記念講演会「古墳時代の漁撈について」

【開催日時】平成30年10月6日（土） 13:30～15:30

【開催場所】和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 研修室

【参加者数】61人

【実施内容・目的】

- 展示に関連して、兵庫県立考古博物館の和田晴吾館長に古墳時代を中心とした漁具の種類や変遷、その使い方についてお話しいただいた。
- 漁具の変遷図を映しながら詳細な説明を聞くことによって、魚を採る工夫や、展示品を見るうえでのポイントについて理解を深めていただいた。



播磨灘から紀伊半島西岸の地域が、漁具の変革の中心地となっており、先端技術を漁具に応用することや、漁撈の専門化が進むことは、王権が関与していることを知っていただいた。漁具から見えてくる海の民と王権との関係について、深く知る機会となった。

【来館者の声】

- 各地の漁具や釣具の発達がよく分かった。
- 地引網漁などが大阪・和歌山から全国に広まっていくことが興味深かった。
- 漁撈の方法は今も昔も大きくは変わらないことがよく分かった。

■特別展講座①～④

【開催日時】 ①平成30年10月20日（土） 13：30～15：00
②平成30年10月27日（土） 13：30～15：00
③平成30年11月 3日（土） 13：30～15：00
④平成30年12月 2日（土） 13：30～15：00

【開催場所】 和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 研修室

【参加者数】 ①34人
②25人
③23人
④21人
合計：103人

【実施内容・目的】

- 展示内容に関連して、和歌山県内・東海地方・三浦半島・房総半島の各地域の第一人者の方で、調査に携わった方に講師をお願いした。
- 展示で紹介している遺跡だけでなく、周辺の関連遺跡についてのお話を聞くことにより、海浜集落の生業や、海を利用した幅広い交流について深く理解していただいた。



第1回は、「紀伊の海人と古代豪族」について当館の富加見泰彦による講座であった。海人とはどのような人たちだったのか、西庄遺跡から出土した漁撈具やカツオ釣針についてお話いただいた。また、紀伊の海人と古代豪族紀氏の関わりについても知っていただいた。



第2回は、「尾張・三河の土器製塩」について東海市立平洲記念館・郷土資料館館長の立松彰氏による講座であった。尾張・三河の中心的な土器製塩遺跡である松崎遺跡を中心に、尾張・三河の各地へと製塩土器が伝播していく様子や、塩の作り方についてお話いただいた。製塩土器が大阪湾岸から技術導入されることや、和歌山でも尾張の製塩土器が出土していることも知っていただいた。



第3回は、「三浦半島の洞穴遺跡 - 洞穴内埋葬から見る古墳時代 - 」について三浦市赤坂遺跡調査団団長の中村勉氏による講座であった。三浦半島における洞穴遺跡の研究史や各洞穴遺跡の特徴と時代による変化についてお話いただいた。また、カツオ釣針についてお話いただき、古事記などに書かれている古代のカツオ漁についても知っていただいた。



第4回は、「房総半島の海人の首長墓」について千葉県立房総のむら主任上席研究員の白井久美子氏による講座であった。房総半島の洞穴遺跡について特徴と時代による変化についてお話いただいた。海人の首長墓と考えられる大寺山洞穴遺跡について、独特な埋葬方法を行っていることについて知っていただいた。

【来館者の声】

- 製塩が豪族の交易において重要な役割を担っていることが分かった。
- アマモやホンダワラなどで塩が作られることを知り興味深く思った。
- 土の中の物と古事記のつながりにロマンを感じました。

■特別展関連ワークショップ「製塩土器づくり」

【開催日時】平成30年10月14日（日） 13:30～15:30

【開催場所】和歌山県立紀伊風土記の丘資料館

【参加者数】23人

【実施内容・目的】

- 西日本最大級の海浜集落である西庄遺跡で使用されていた、丸底Ⅱ式製塩土器と同じ方法で製塩土器を製作した。製塩土器の製作方法や特徴から、塩を大量生産するための工夫や土器を製作するうえでの苦労などを体感してもらった。生活に欠かせない塩は、海の恵みによってもたらされており、当時の人々が海とともに生きていた事を学んだ。
- 塩を大量生産するには、製塩土器の大量生産が欠かせなく、そのための工夫を本物の土器を触って感じてもらった。



本物の製塩土器を触ったり計測したりすることにより、その大きさと器壁の薄さについて実感してもらった。その後、粘土を用いて当時と同じ方法と道具で製作体験を行った。陶芸家の方に実演してもらうことにより、詳しい作り方を知ることができた。最後には本物と同じような土器を作ることができていた。

家族での参加が多く、苦労しながらも楽しく作っていた。薄く作ることの大変さを感じていただけ、当時の工夫を学んでいただけたと考えられる。

【来館者の声】

- 実際に土器の作り方を勉強できた。
- 子供といっしょに作ることができ、笑顔を見ることができた。
- 実際に触ったり、作ることができて楽しかった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等できません。

■特別展関連ワークショップ「古代の塩づくり」

【開催日時】平成30年11月18日（日） 13:30～15:30

【開催場所】和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 体験広場

【参加者数】31人

【実施内容・目的】

- 濃縮した海水を煮詰めて、古代と同じ方法で塩をつくった。地面に穴を掘った地床炉と石を敷き並べた石敷製塩炉の2種類の方法で行い、違いを体感していただいた。
- 古代の塩づくりの過酷さを体感し、塩が貴重であったこと、海を利用することの大変さを理解し、海の恵みを知る機会とした。



塩の作り方や塩の役割についての話を聞いてから、土器を用いた塩作りを行った。

2種類の方法で塩づくりを行い、燃焼効率の違いを体感していただいた。製塩技術の変化から、海の恵みを効率よく多量に得るための知恵と工夫を実感していただけたと考える。

塩ができたときの喜びと、大変さを感じていただくことができ、多くの学びがあったと思う。子供が熱心に参加しており、楽しく学べていたのがよかった。

【来館者の声】

- 初めて塩作りを体験できてとてもよかった。
- 今はすぐに買ったりして塩を手に入れられるので、昔の人々の知恵に感謝したい。
- 日本は海を活用しやすい環境であるため、もっと積極的に守っていかなければならない。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等できません。

■ 展示解説

【開催日時】 平成30年10月8日（月・祝）・28日（日）
11月4日（日）・11日（日）・23日（金・祝）
13:30～14:00

【開催場所】 和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 展示室

【参加者数】 74人（大人：49人、高校生：1人、小学生：24人）

【実施内容・目的】

- 展示資料について担当学芸員が解説を行った。展示資料の見所やその意義について伝えるとともに、見ただけではわからない使い方などについても説明を行った。
- 展示室を回りながら解説するとともに、海との関わりや海の恵みの重要性についてもお話した。



各遺跡や展示資料の説明を行うとともに、交流がわかる資料を紹介し、和歌山と周辺各地の海の民の交流について知っていただけたと考えられる。また、海の民の生業について深く学ぶ機会となったと考えられる。

子供からの質問が多くあり、色々なことを学んでいただけたと思う。解説を聞いてより深く知ることができた考えられる。

【来館者の声】

- 展示物の説明がとても面白かった。
- 黒潮の流れと文化の伝播、人々の生活について思いを馳せられました。
- 船の構造や加工の工夫がよく分かった。

【事業全体のまとめ】

- ・サポート事業を活用したことにより、千葉県や神奈川県など遠距離の借用を実現できた。また、通常よりも多くの場所から借用を行うことができたため、多くの関連資料を展示できた。
- ・展示に関連したワークショップの開催や、講座など多くのイベントが実施できたため、展示内容をより深めることができた。講座については、普段聞くことができない各地域の第一人者の方から、お話を聴くことができたことが好評であった。
- ・展示や講座、ワークショップをとおして、海について深く学ぶ機会を提供できたことにより、普段身近にある海の重要性や、守っていくことの大切さを多くの方に再認識していただく機会となった。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 和歌山県立自然博物館	塩作り用の海水の提供・貴重資料の借用
2. 東京国立博物館	写真の借用
3. 大阪府立弥生文化博物館	写真の借用・情報提供
4. 名古屋市博物館	貴重資料の借用協力
5. 鈴鹿市立考古博物館	貴重資料の借用協力

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 紀伊民報	黒潮の海に糧をもとめて—古墳時代の海の民とその社会— 9月29日
2. 産経新聞	古墳時代 海の民紹介 9月30日
3. 毎日新聞	「海の民」古代の暮らし 10月3日
4. テレビ和歌山	6時のニュース 9月29日
5. 和歌山放送	サタデー ニュース&スポーツ 9月29日

以上